



TITLE:

## 道德統計論概説(二)

AUTHOR(S):

財部, 静治

---

CITATION:

財部, 静治. 道德統計論概説(二). 經濟論叢 1924, 19(1): 27-46

ISSUE DATE:

1924-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128185>

RIGHT:

# 會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號一第 卷九十第

行發日一月七年三十正大

## 論叢

所得本體の不明確又は捕捉難に基く不公平課税の可能  
法學博士 神戸 正雄  
 道德統計概論説  
法學博士 財部 靜治

フォン・ウイゼの社會學論  
文學博士 米田庄太郎

海運同盟に對する政策  
法學士 小島昌太郎

## 時論

米國の排日立法より生すべき重大なる結果  
法學士 作田 莊一

## 說苑

諸國の自作農創定事業  
法學博士 河田 嗣郎  
 獨逸レンテン銀行に就て  
法學士 大森 研造

## 雜錄

勞農露國に於ける幣制改革問題  
經濟學士 谷口 吉彦  
 京都帝國大學經濟學會大會記事  
委員

# 道德統計論概説 (二)

財 部 靜 治

目 次

五、道德的中人論評

六、偉人の統計的研究

七、道德統計論の研究範圍

## 五

晩近統計學にありても、中數論は重大の地位を占む、それは兎も角ケトレーは、一の社會的群に  
は一の中人あり、人に關する諸中數を土臺として之を究め得べく、そはその群を組成せる群衆の  
典型なりとの觀念を吐露したり、されど嚴密なる主實主義を奉する限り、前記統計難てふ一理由  
のみに訴へても、亦道德統計により道德的中人を、決定し得ざるを知るべし、假りに一步を讓  
り、感情乃至精神生活につき、完全なる觀察を遂げ得べきものとしても、かゝる材料により道德  
的中人として、實際に現はれ來るが如き、一人を決定し得べきに非るは、觀易き所なり、夫れ一  
般に中數値は大量現象そのものに就きては、その效力を認め得べきも、大量組成分子たる個體を

個體とせるものには、必ずしもその效力を及ぼすを得ず、一國の人口萬に付平均二の自殺ありとの蓋然率は、人口群につきては將來も效力ありとなし得べきも、之を組成せる各個人につき、五千分の一の自殺蓋然率ありとするを得ず、加之中人決定に之を利用するためには、方法論上の諸非難あり、中人を以て民衆の代表者たらしむることに、方法論上の價值ありとするを得ず、大多數の特徴は何等典型的中數値を、示すことなければなりとすべきはその一なり、一特徴の中の大さと、他の特徴の中の大さ（假令ば中の勇氣と中の情け）と、他の特徴の中の大さと、必ず同一人に兼備さるべしとの意味により、諸查察特徴間に照應關係は備はらずとすべきはその二なり、晩近統計學は特異化及仔細別の研究に努め、學問の目的上普通中數値を利用するは、稀なる場合に過ぎずとすべきはその三なり、かく實際に現はれ來るが如き、道德的一中人を決定し得べきに非るは、身體上の諸平均特質明かにされたればとて、之を組合せつゝ、身體に關する實際一中人の構成に之を利用し、無條件に之をその民族の典型視し得ざると異らず、然るに事實上幾多の精神的道德的特質は、計量し得べきに非ず、従ひて全く統計的研究を、遂げ兼ねるの事情あり、されば一人の精神的道德的資質につき、一の計數的説示を發見するを得ず。それにも拘はらず道德統計論は、心理學的研究に重要な貢獻を授け得べし、唯此範圍に於ける學問的研究が、尙大部分不備なることも否定し難し。

\* cf. Conrad-Hesse, Statistik, I. 5. Aufl. '23 S. 17; Žižek, op. cit., S. 27; Westergaard, op. cit., S. 189 u. 192.

種々の道德的關係上、平均として示さるゝが如き人を、實在の一人視し得ざるは上述の如し、況して之を一種の理想視し得べきに非ず、然るにケトレーが「中人にして完全に決定せられたりませんか、之を以て美及善の典型視し得べし」と主張し、そは自然が人としてしかあるべきことを希望し、又人々が之に上達せんと努むべき、典型又は標準たりとの、靜力學的含意を宿せるは不正なり。中人は寧ろ善及惡の程よき一平均なり、人間のあらゆる弱點及私情をも、一切の德をも兼備せる、一の總和的傀儡たり、平均人の良心には、各醜行の一片附與さるゝと共に、高尚の氣稟に出で高傑なる心情より發せる、諸行爲の一片も附着せらる、その智能的特質につきても同様なり、平均人は暗愚及賢明、啓發及蒙昧の一混合なり。假りに都合よく之を決定し得たりとするも、そは個々の道德的特質につき、典型視され得べき平均の數多を、繋ぎ合せたるものに過ぎざるべし、人間中觀察を遂げ得たる部分又は階級民丈けにつきては、便宜上その民族又は階級の代表的典型として取扱はれ得べきことあり、又之が比較研究により有益なる結果を擧げ得べきことあるも、美及善の典型に非ず、美及善の典型は一の理想たるべく、之に達せんとして人の努むべき所なり、そは人間の德及尊嚴を悉く備ふべきも、その缺點は備へざるべき一理想なり。<sup>\*</sup>

一般に平均により示さるゝ値に、相當すべき實際態様の事物ありとは、理性に訴へて考へ得べきことたらざる際、その平均は計算上の抽象に外ならず、(拙著「社會統計論綱」三一五頁以下參照)こは假

\* cf. Haushofer, op. cit., SS. 452, 453.

令ば現在生存者又は一期間内の死者につき、算出せる平均年齢につき言ひ得べき所なり、中人も亦大體にかゝる計算上の抽象に過ぎずして、理想又は代表値としての典型に非ず、兎に角その中人が人の適當なる分化を問ひつゝ、決定されたるものならざる限り、然りとすべき所なるが、此制限たる中人の發明者又は尊敬者たりし、クトレーにありては恰も重きをおかれざりし所なり、而して右の如き平均は、妄斷を避けんとする限り、始めより特に警戒しつゝ之を取扱ふべし、平均の要度を過大に評價することは、クトレーによる中人の過度尊重に、その古典的表白を見たる所なるが、注意深き學問的研究者としては之を誠しむべし、統計學は概して中數値の學問たりとの見解は、現今著しく擡頭せる所なるが (Franz Žižek の著書 Die statistischen Mittelwerte, '08. 及その英譯 Statistical Averages, tr. by Warren Miloud, Persons, '13. あることを注意すべし) 若し統計學の學問的職分として、別に豊富なるものあるを全く忘れて、之を説くが如きは同様に誠しむべし。<sup>\*</sup>

輓近統計學者中には、平均の究明に重きをおかず、寧ろその反對に個別觀察の重んずべきを力説し、かくて平均過重論の反動とも、觀じ得べき立場を採る者あり、即ちその一例として Boxcar は曰く「大量現象を括約し、一見典型的なる平均價值を得たる際にても、更に逆進的に大量の分解を遂げんか、平均に對する著大の相違及偏倚は、平均價值により反映さるゝよりも、間々遙かに特色ある結果を授け、社會狀態了解の目的上、遙かに意義多く又重大なる結果を授くべし、

\* cf. Mayr, Theoretische Statistik, 2. Aufl. '14 S. 170.

平均價值研究の方法により、一國民又は一人口群の開化狀態に關し、非難なき一總世相を會得することなかるべく、否會得し得べきに非ず、統計法の應用は一樣に又個別研究のために、信すべき補助方便たり得べきものなるが、吾人の見解によれば、そは大量觀察を本とする研究として、大數の法則適用を、無條件にその條件とすべきもの、必然的對照たり<sup>\*</sup>と、而して道德的中人論研究に對し、かゝる見地より試みたりと觀し得べき研究、二方面に存す、一は大罪人の研究にして、他は即ち偉人の統計的研究なり、前者は姑らく之を措き、今后者につき少しく説かん。

## 六

世には貴き偉人あり、中人以上に大に傑出し、人間の誇りたり、そは理想たり、又理想或は模範として數百萬人中の中人に比し、遙かにその勢力に富めりとすべきことあり、彼等は夥しき凡人中より、挺身しつゝ、向上を續け、又夫等群衆に迫りて、彼等とその向上を共にせしむ、尤も前記クトレーの論旨を貫かんか、中以上なる人々は、その以下なる人々同様、並外れ（逸軌）視すべきを以て、偉人又は天才は不具者たり、不具者として社會への祟り物たるは、社會への一福來たるを異とせしむること、直ちに立證され得べし、現に伊太利の Lombroso は、（特に *L'uomo di genio in rapporto alla psichiatria, alla storia ed all'estetica* '88. 同英譯 *The Man of Genius*, '91. 中）この天才觀を言明し、天才を以て病的たりとし、之を癲癇及狂者と組合はせたり、換言せんか天才は光輝赫灼たりとす

\* cf. Bleicher, op. cit., SS. 8, 9.

\*\* cf. Haushofer, op. cit., S. 453.

るも、それは結局犯人同様、身心頽廢觀念を代表し、凡庸の安全なる一軌範に對する、社會的墮落の一例證に外ならず、從ひて人間の進歩は兎も角遂げらるべしとするも、それは墮落し又不健全なる天才により完成されず、寧ろ發生學的淘汰の自然進化的方法により、群衆を向上せしむるの、極めて退屈又緩慢なる、過程により遂げらるべしとせり、Lombroso は是等の結論を、觀察法及統計法により確立せんとせるも、天才即不具者てふ、その悲觀的信念により、過分に影響されたる風あり、從ひて不具的天才と拔群 Supernormal なる天才との、區別を忽かせにしたり。\*

此點につき才幹及天才が、自然の尋常產物たりとの、反對假説を立てつゝ進めるは、Galton の天才研究なり、氏は實に眞の科學的研究に、必要なる諸性質を備へ、新觀念を發明すること泉の湧くが如く、之と共にその觀念を觀察により驗めすことに、驚くべき勤勉及忍耐を示しつゝ、一代より次代に至る、身心の諸特質遺傳を律すべき、諸法則の研究に當り、特に偉人の科學的研究を試みたり、(氏につきては「社會統計論綱三九六頁參照」)即ち氏以前にケトラーは統計を使用し、社會の諸原理を究むるの可能を示し、又ダーウィンは生物學に於ける、科學的觀察の終始必要なるを示せるが、是等の二方法を組合はせ、又天才は遺傳的たりとの假説より出發しつゝ、人間界には一の天才階級宿され、社會に生み出さるゝ如何なる才子天才も、大部分は此階級より出づと、期待さるべきことを示さんとせり、勿論その思想中には、この階級に入るべき者、實地に確かめられ

\* cf. J. Q. Dealey, *Sociology its Development and Application*, 20 pp. 332, 333.



得べしとせんが、是等の人々を育成するため、社會的努力を適切に施し得べく、從ひて又社會進歩の保證たる、天才の豐作期して待つべきことを含意せり、此論旨を論理的に貫かば、優是育 Eugenes の學問を認むべきこととなる、現に同名目は一九〇四—五年の比、Galton により起されたり、その目的とする所はあらゆる階級につき、統計的研究を遂げ、依りて人口中如何なる部分を以て、よく生れ付きたり、從ひてその種を蔓らしむるの、値打ありと考へ得べきかを確かめ、他の一面には如何なる部分を以て、蕃殖を控へしむるの要ありとすべきかを確かめ、又は類廢せる群衆なからしめんと努むるにあり、されど Galton の論旨上重きをおかるゝ點は、基本的因子としての遺傳にあり、即ち生れ乍らの天才は出世せんこと、始めより請合はるとするの假説にあり、尤も環境の諸因子により、遺傳的天才を助勢又は阻碍すべきことは、Galton も之を認む、次に又氏は天才が本來、男性に屬すとの假説を採れるに似たり、氏の論議中終始一貫婦人を粗略に取扱へばなり、唯才幹ある婦人は、自然に才幹ある家族の出たるべきこと、同一階級内相互の重婚により、優良種より天才、才子を生むの望を、二重に確かならしむべきことは、氏も首肯すべしと推測せらる、要するに Galton の見地よりせんか、優是育は統計その他の方法により、遺傳の諸原則を確かめ、かくて之に社會的助勢を加へ、身心共に剛健なる積極的進歩的血統を蕃殖せしめ、他の一面身心共に虛弱なる類廢種を、減少せしむるの實を擧げんとす、かゝる優是育

がその基本として Galton の假説を奉ずる限り、一面には才幹ある家族の、比較的少數なる分子に重きをおき、他面には生れ乍ら殞斥さるゝの、運命を授けられし、頽廢者の同様少數なる分子に、重きをおく傾向あるべきや、明かなるに似たり、かくて中人詳言すれば、才子及天才たる男子により、影響され陶冶さるゝの材料に、多分相當せりとすべき群衆は、大部分看過せらるゝことゝならん。要するに氏の論旨にありては、人才及天才も自然の尋常産物たり、遺傳的たりとすべきに拘はらず、そは人品上凡人以上に高きを以て、人間進歩に於ける前進運動の先鋒となり、又人間の心的發展に於ける、諸可能の表徴として、後人のために前途を照すとせり\*。

Galton による右の天才論は、第十八世紀の社會的哲學的論旨に對し、著しき對照をなす、即ち後者にありては一般に、人の平等を假定し、一切の人は生れ乍らにして平等なり、諸相違實際に存するも、そは全く諸社會事情、社會的環境に由ると論じたり、此見地よりせんか、齊一なる諸事情と、型高尚なる社會的環境と、あらゆる階級の尋常人のため、一樣に備はることゝなる限り、社會は相當の時日を假すと共は、彼我略平等なる公民より、組成さるゝことゝなるべし、而してその所説が一の天才論たらずして、凡人による平均上達に關する、一學説たるは注意さるべき所なり、唯右教育により得らるべき平等の、大主張者たりし Claude Adrien Helvétius (一七二五—一七九一年、*De l'esprit* の著あり) にありては、その論旨一方に廣げられ、その結果有爲の才は、全體と

\* cf. Dealey, op. cit., pp. 330-332; D. Caradog Jones, *A First Course in Statistics*, '21 p. 3.

しての人間界内に、潜みて存在す、かくて適當なる諸事情の下、甲又は乙の階級より、一樣に現はれ得べきことを認めたり、換言せんかその主張によれば、天才は潜勢的なり、之が開發には機會を要す、而して天才は一切の人により生得せらるゝことなきも、一切の階級には固有なり、從ひて相當の事情及環境完備するときは、才子及天才は農民たると貴族たるとに論なく、一樣に湧き出でんとせり。右の見地によれば環境の重みに就き、強き力説あり、されどその以上にその啓發能力上、潜勢的に群衆より勝れりとするべき人物は、人間界を通じ、所在に散在することの承認を伴ひ、又この潜勢的天才は、必ずや實現さるとすべきことなし、之がためには鼓舞すべき環境と機會とにより、照らさるゝの要ありとするの論旨を伴ふ。右の學説は Galton の説けるものと異れり、即ち后者は天才が一社會階級、多分又その階級の男子に固有なり、而してその天才は環境又は機會の如何を問はず、世に現はれずんば已まざるべしと論するに似たり、然るに他の學説によれば、天才は一の天才階級内に限られずして、廣く人間界にあり、又同様に男女兩性の内にあり、唯之が開發のため機會を要すと論ず、近年に至り Lester F. Ward はその著 *Applied Sociology*, '06. 中、佛蘭西の大文人に關する Alfred Odin の統計的研究 *Genèse des grands hommes*, '95. を、その議論の土台に使ひ、Helvetius の學說辯護の勢を執らんとし、文献を周到に商量し、賛成論及反對論の舉證を、比較秤量せる后、事實上 Helvetius とその説を同じうせる Odin

の諸結論に裏書したり、Ward の説によるに、人間界に於ける潜勢的天才の大多數は、現事情の下にありては開發せられずして已む、されば相當なる社會組織を得ば、實在の天才は直ちに數くとも百倍に増さん、婦人をも亦當然勘定に入るゝの要あるが如く、之をその數に加へんか、一代に於て明かに天才とすべき者は、二百倍に増されん、その外一層良好なる一環境の下、凡人の心的能力も高めらるべしとせり、而して潜勢的天才を鼓舞し啓發せしむべき、環境の實際因子として、Odin により舉げられ Ward により精説されしものは次の如し。

一、特別の智能的刺戟及便益を宿すべき人口中心地、

二、心配なきこと、經濟的安全、餘暇を保證すべき、物質的手段の豊富、又かく豊富なるため、研究用の諸裝置を備はらしめ得べきこと、

三、自重、尊嚴の感念、豫備力を養はしめ得べき社會的地位、一人として出世の大目的の目錄中に、その名を列するの値打及權利ありとの自信を、その人に懷かしめ得べきは、右の諸心理に限らる、

四、青年の間に於ける、周到又長期に亘る訓練、之がために事功のあらゆる方面に通ずるに至り、その中にてその人の智能的性向及趣味に適へるが如き方面を選ぶことを得せしむ。<sup>\*</sup>

要するに Galton 一八六九年の名著「遺傳の天才論」以來、學問的となりつゝある諸學者の天才

\* cf. Dealey, op. cit., pp. 333-335.

研究、及之が詳しき評論は、社會學の研究に譲るも、是等學者の研究に、採用されたる統計的研究には、見るべきものあるを注意すべく、同時に是等の研究により、惹起さるゝ興味に眩惑せられ、前引用 Öttingen の道德統計論に、加へられしと同様なる評論を、(本誌前號十七頁參照) 是等にも加へ得べき機會、尠からざるべきことを忘るべからず、蓋し天才何たるかを定むるの客觀的標準、必ずしも備はれりとするを得ず、之を定め得たりとするも、之が悉查の見込は大に制限せらるべきを以て、自己の持説を確かむるに都合よき、材料蒐集偏重の弊に、陷り易かるべきを以てなり。

## 七

道德生活は一般人間生活の全範圍に表はる、かくて夙に Öttingen もその著書中(甲)人間有機體の生殖(その中に男女の兩極性及平準、男女共同體及結婚、離婚及離婚者の再婚、不規律なる男女共同體及賣淫、娼女蕃殖及人口移動、私生及棄兒を分つ)、(乙)人間有機體に於ける生活實現、(い、民事法の範圍に於ける社會倫理的生活實現、その中には一面經濟統計的なるものを、他面刑事統計！を收むる、智能的美的教化の範圍に於ける社會倫理的生活實現、即ち事實上全教化統計を、道德統計論に入る。は、宗教的道德的範圍内に於ける社會倫理的生活實現)、(丙)人間有機體の死亡(い、道德的因子と關聯せる衰弱及死亡、その中には特に疫病、狂氣、酒精中毒、梅毒、慢性自殺！。只合衆責任の發露たる殺人犯、その中に過失殺兒、戰爭！をも入る。は、自殺。に、結論\*)を分ち説明し、Haushofer も要領を之に酌

\* cf. v. Öttingen, Die Moralstatistik, '82 Inhaltsübersicht.

めるが如き、分類を試み説明せるも、以下主として v. Mayr がその道德統計論中に採用せる分類系統に則り、<sup>\*</sup>その總研究範圍を一瞥することゝせんか。

道德統計論に於て取扱ふべき社會大量につき、自から之を二大別し得べし、即ちそは前に説ける所により推知すべきが如く、第二次的に至りて初めて道德狀態及現象を反映すべきも、第一次的にその性質を標準とするときは、學問的統計論の他の部門に於ける觀察範圍に歸すべき、社會大量とすべきものその一にして、第一次的に道德狀態及現象を表明すべき、社會大量はその二なり、後の大量につきても第二次的に生すべき、他の社會的意義に鑑み、臨機に學問的統計論の他の部門に於ても、亦之を問ふことゝするは妨げず、かくて道德統計論の大部分は、實際統計學の諸部門に對し、排他的たることなきは明かなり、寧ろ道德統計論上研究さるゝ材料は、實際統計學の諸部門に屬し、その大部分は實地統計上、道德統計以外の用に供せんとして調査せらるゝ、特に特殊の社會大量は、特例として單純化されたる形式によりては、統計學の他の一範圍に於て考察せられ、法律に本づきて施さるゝ特別觀察法により察取せらるゝも、取擧げたる觀察の仕方によらば、特に又道德統計論にも屬すとすべきものあり、その特例は離婚及自殺につきて之を見る、就中離婚は人口動態の統計論に於て、特殊の婚姻(關係)解消として、尋常なる解消の仕方(配偶者の一方の死亡)と共に問はるべきも、離婚に伴ふこの人口統計的意義は、その道德統計的意義に比す

\* v. Mayr, Moralstatistik. S. 19 ff.

れば遙かに劣れり、從ひて此理由よりするも、既に離婚を以て一次的道德統計の性質を帶べる、研究範圍視すべきなり、その外注意深く仕遂げられたる離婚統計は、人口統計上意義ある、婚姻解消の事實を確かむることに限られず、特に離婚を促せる理由に關し、別の觀點をその考察範圍に採り入るゝの事情あり、之がためには離婚訴訟の記録を利用することゝすべし、かくて人口統計の特別關係以上に、引延ばされたる特殊の材料を生じ、之が統計的整理上第一次の目的とする所は、當該理由により惹起されし婚姻解消の程度に關する、一觀念を收めんとするに非ず、寧ろその離婚の現況及發展に表明せらるゝ、道德狀態の統計的一事相を收むるを目的とす、從ひて離婚統計はその正當なる立場を、一次的道德統計の範圍内に宿すを見る、かくて道德統計論にありては、一般的に時及處による離婚の相違を問ふのみならず、特に離婚者の年齢、婚姻繼續期間、子の有無、離婚者の人身に關するその他の諸事情、假令ば人種、國民性、その婚姻前に於ける配偶關係、職業、信教、更に尙離婚の理由を問ふが如き大に意義あり。<sup>\*</sup>次に自殺は要略的には他の幾多死因と共に、人口統計論の材料中に、錄取せらるゝこと通例なるも、その外自殺は道義心の表徴 (Mayo-Smith, *Statistics and Sociology*, '95 p. 238. 彼は自殺を以て、犯罪と共に index of social condition とし、その用途上富の増進、貯蓄増加等によるよりも、一層確かなりとし、尙次頁には之が研究に就くと共に、道德統計の範圍に入るとせり) として、重大の意義あり、之が察取に伴ふ、特別の道德統計的興味あるがために、原則と

\* cf. v. Mayr, *Begriff und Gliederung der Staatswissenschaften*, 4. Aufl. '21 S. 224.

して別に又之を手廣き特別調査の物體となし、自殺未遂にも亦その調査を及ぼさしむ、現に國家が自殺未遂を、犯罪行爲中に加へざる場合にて、國家組織上自殺を以て、注目すべく憂ふべき出來事視するがために、之が明確なる査定及記録を求め、かくて道德統計上重要な材料は、同時に授けらるゝに至る、かかる調査の結果、一次的に道德上の意義ある現象を示すべく、從ひて道德統計的意義ありとすべき、細別豊富なる自殺大量を收むべし、そは人口減少の事由たる程度に於て、純人口統計的意義を帶ぶるも、そは全く輕視すべき所なり、即ち道德統計論にありては、一般に時及處による相違を問ひ、その間詳細なる地方別研究 (Detailgeographie) の刷新を期するのみならず、特に又自殺の季節的動搖、自殺者の男女別、年齢及配偶關係、職業、信教、教育程度、經濟上の地位、體質、人種及國民性、自殺の方法並に自殺の動機を問ふべきなり、かくて又自殺數と一般社會狀態及現象との總關係に關する研究を以て、便宜上自殺統計に關する學問的考察を結ぶこととすべし。<sup>\*</sup>

道德統計論のために意義ある、社會大量の右二大別は、道德統計論の全範圍を、二次的に道德統計的なるものと、一次的に道德統計的なるものとに、分つの標準に供し得べし、前者中には人間道德生活認識のため、二次的に意義ありとすべき、社會大量の統計を含む、從ひてそはその統計學的闡明上、一次的には人口統計論、政治統計論、經濟統計論に、分たるべき社會大量に關

\* cf. v. Mayr, Begriff usw., S. 224; Ders., Gesetzmässigkeit usw. S. 329.



す。

是等の大量を道德統計的研究の、特別範圍内に採り入るゝためには、別に一條件を要す、それは人口靜態及動態、並に經濟的、政治的生活實現中、倫理的觀點の下尋常狀態及現象として、別に現はるべきものに對し、悖反し偏倚せりとして明かに認識され得べきものに關すること之なり、かゝる偏倚は或は善の方面の現象となりて、現はるべき道德力上進たりとの意味にて積極的たり、或は尋常道德力萎縮のため、消極的に惡の方面の現象として現はれ得べし、兩者の間に介在すべきもの、詳言すれば諸狀態及現象中、道德的に無意義とはせざるも、倫理的見地より單に目立たざる尋常視さるべく、又かゝる尋常狀態及現象として、倫理上の特別性質を有せざるものは、凡て道德統計的特別考察の對象をなさず、されど二次的道德統計論の各部を、詳察するに當りては、一面道德統計論と他面統計學の他の部門との間に、斯くの如く幾分か中立的な部分あることを、恒に指示するを可とす、而して之が統計學的該括研究は、道德統計論以外に存すべき、他の部門の統計學に歸すべし。

人口統計論、經濟統計論、政治統計論に取扱ふべき社會大量中、統計により確かめたる事實につき、何等倫理的評價を施すの由なきもの、殊に又最も一般的なる性質を帶ぶるものは、道德統計論と全く何等の關係をも有せざるべし、之が實例としては、人口統計論により示さるべき、人

口靜態上の幾多細目として、純民誌的事實視さるべきものを挙げ得べし、即ち人口の大きさそれ自体、年齢構成、職業別一班、不具者の普及程度等は然り、又人口動態統計論中にては、死亡の現況、疫病の勢威を舉ぐべし。經濟統計論にありては、生産統計の大別及細目、職業別經營別の細目、貨物交通及運送の發展等を茲に數ふべく、政治統計論にありては、國務の分掌と公事に於ける國民參與の權能とを、叙説せるもの茲に屬す。

二次的道德統計問題を取扱ふべき部分は、その道德統計論上考察せらるべき大量を、その細目全般に亘りて取扱はず、その大部分は人口統計論及道德統計論的考察法を施すため、幾分か完き共通範圍視せんとす、茲に先づ注意すべきは、同時に道德統計論によりても、亦研究の要ありとせらるべき、社會大量特に部分大量は、特に人口統計論の範圍に於て、取扱はるゝ機會頻繁なるべきことなり、之と共にそは特に普通の人口靜態及動態に於ける、狀態及現象の逸軌に關す、かかる逸軌の典型たるべきものを、茲に先づ例示せんか、人口男女別、年齢別(特に大都市民大工業地區の)及配偶關係別、所帶及家族(特にその他人分子)の形態に於ける大偏倚、私生、異常なる出生減退、夫婦婚姻年齢組合せの異常、小兒特に乳兒の死亡、特別の死因特に梅毒及酒精中毒による死亡等は然り、嫡出の統計と雖も亦その數が、多數家族に於て故意に制限せらるゝことを推測せしめ、かくて嫡出出生減退異常の程度に達せりとすべくんば、等しく道德統計論の材料たるべし、

時としてはかゝる逸軌に特別興味を伴ふため、その興味に促され、その範圍に歸すべき社會大量を、更に尙特別なる道德統計的研究の對象となすことあり、假令ば私生の統計に附帶して、更に一步を進め私生の母に就きその經歷を究め、或は私生兒生涯の運命を、尋ねることゝするが如き之なり、精細を極むべき系統論編成よりせば、問題となせる二次的道德統計論上の逸軌に關する、右の添附的餘分研究を、一次的道德統計論に移すべきことゝならん、されど更に一步を進めて考ふるときは、問題となせる諸社會大量の關聯を適當に維持し、かくて此種の一次道德統計論的性質を帶べる補充研究を、系統上例外的に二次的統計論の序に、研究せしむるの一層適切なるを知らん、人口統計論は又上に説けるが如き意味により、道德上尋常視さるべきものを、その範圍内に於て注目すべき程度により、序説的に指示すべき機會を授く、之につきては人口の構成假令ば配偶關係別及職業別による構成も、人口動態特に婚姻及出生の現況も、等しく問はるべし。<sup>\*</sup>政治統計論にありては、前に限定せる意義により、二次的に道德統計的なるもの、比較的にも尠し、假令ば選舉をその形勢に應じて表示せるもの、特に各政黨の強弱を明かにせるものは、選舉人の投票を黨派別とせるものと共に、國民生活の道德的特殊大暗流を洞察せしむ、そは特に社會民主黨、及一宗派を標榜せる政黨に關する、計數によりて然りと雖も、そは常に輕微なる程度に限らるべし、又此範圍に於て道德的に尋常視すべきものを、統計的に究むることを、問題と

\* cf. v. Mayr, Begriff usw., SS. 221-223; Lexis, Art. 'Moralstatistik' im Handwörterbuck der Staatswissenschaften, 3. Aufl. VI. S. 784.

なし得べきことありとしても、その意義は一層輕少なるべし。

經濟統計を用意周到に刷新せしむるときは、道德統計的なものを豊富に收め得べし、例證のため略説せんか、職業及經營統計を詳細ならしめ、その間或は事實上絶對的に賤しき職業の種類（假令ば賣淫婦）を問ひ、或は一職業に事實上従事せることそのものとしては、特別の道德的評價を下さしめざるに拘はらず、之に従事せる者の割合不尋常なるがために、（以下又は以上）かゝる評價を下すの事由となり得べきもの、假令ば居酒屋を問ふことゝせんか、かゝる材料は授けられん、又民事裁判の詳細なる統計は、素より現今尙大多數の國にて行はれざる所なるも、その統計備はるに従ひ、道德統計上貴重なる個別材料を、授くべきや期して待つべし、こは男女關係親族關係等と金錢關係との、紛糾錯雜せる事情に本づき、惹起さるゝ民事訴訟事件の個別的事例につき、道德的評價を挿み得べきにより、推知し得べき所なり、かゝる材料は破産統計によりては、現今既に幾分か授けらるゝ、その外一般に酒精飲料及麻酔劑的嗜好品の消費に關する計數、奢侈品の生産又は輸入に關する計數、取引所取引の普及に關する計數、乞食數等、道德的意義を伴へる經濟現象は多し、又多くの經濟統計的觀察は社會の道德狀態につき、直接には何ものをも照すことなきも、そはその狀態如何と密接の因果關係ある、諸事實に關すどすべく、その因果關係は道德統計的計數系列との、比較により明かにせらるゝ、その例として擧ぐべきは、必要食料代價の統計、

諸社會階級に於ける、所得分配の統計等なり、職業統計も亦或程度迄は茲に數ふべし。<sup>○\*</sup>

經濟統計の範圍にありては、道德的に尋常なるもの、意義甚だ大なり、疑もなく經濟統計的な幾多表示中には、經濟生活の範圍内に於て、道德的義務の尋常支配あることを、同時に一般的に舉證するものもあるも、それは疑もなく經濟統計論の範圍に屬するのみなるべし、このことたる大體に私的發意に基づく、全國民經濟の全形態につき、又特に基本的なる貨物生産、及之が終結たる分配に關する、國民經濟の規律ある機能につきても、特殊の意味にて謂ひ得べき所なり、倫理は著しき程度迄經濟を左右すべきこと、かくて純唯物史觀により說かるゝが如き意味により、之と反對なるが如き事實なきことは、疑を容るゝの餘地なし、唯尋常なる經濟的最終決意は、かく道德的考量をも酌み入れて遂げらるゝも、それは經濟的事實なり、計數計量による之が大量觀察は、經濟統計論のみに歸すべし、尤も此範圍に於ける道德的逸軌には、道德統計的秤量を施すべきこととなるべし、救貧及慈善の統計は、幾分か茲に問へる實際統計學二部門の一混合區域なり、任意慈善の統計は、一次的に道德統計的なものゝ範圍にて、特別考察に委ぬべきも、救貧に伴へる道德統計論の分子は、經濟統計論の救貧編にて示さるゝことゝすべく、從ひて又道德統計論に於ても、二次的道德統計論内に於て、救貧に關する計數の、道德統計的意義を指摘すべし。

二次的道德統計に關聯し、教化統計論につき一言する所あらんか、それは身體及精神の暢達啓發

\* cf. Lexis, op. cit., SS. 784, 785.

に努むべき範圍につき、統計にとり得べき大量狀態及現象を究めんとす、就中智能生活萬般の察取に重きをおく、特に教育及教養制全般、その他教化の目的上現存せる諸營造物及諸施設の現況を問ひ、教化のための諸協會をも問ふべし、吾人は便宜上之を道德統計論に、併せ研究するも可なりとなす者なるも、之が分立を主張せる V. Mayr が、此範圍につき求むべき二次的道德統計論の材料に關し、説ける所を附説せんか、此範圍に於ても二次的に道德統計的なるもの、比較的に尠し、特殊人口群に於ける好學心の過度開發、又はその異常なる欠缺に示さるゝ逸軌、又は之が特殊方向に偏せる點に示さるゝ逸軌を、その例として挙げ得べし、義務教育の範圍内にありては、生徒群の處爲中道德的にも亦幾分か秤量すべきものとして、兆候的に不就學歩合、缺席歩合に表明せらるゝものあり、されど教化制に智能的及道德的性質組合はさるゝこと、並に右の計數以上教化を受くるを、その分とせる者により、教化の諸機會が利用さるゝ度合を、窺はしむべき大量説示あることは、序説的に之を考ふべきなりとせり。（未完）